追憶

清原貞雄博士の生涯と業績

渡辺澄夫

本会顧問文学博士清原貞雄先生は、老衰のため去る三十九年九月十三日杵築の自宅において逝去された。享年八十才。同月十五日同市一松会館において神式による盛大な告別式が行なわれた。会葬者は県下知名の士・教え子等多数で、先生の生前の御遺徳を象徴するかのようであった。本会からも弔電を差し上げ、私が会員を代表して参拝した。

清原先生にわたしがはじめてお会いしたのは、昭和七年に広島高師に入学した春のことであるから、もう三十二年も昔のことである。当時先生は四十歳台の働き盛りで、すでに学位も得られ、文理大の教授として学界に不動の地位を築かれていた。先生の講義に列したのは大学入学の同十一年からであるが、それまで毎年の県人会などでお世話になり、世話ずきのステ夫人とともに学生の信望を一身に集めていられた。

私は先生の日本古代史と日本思想史の講義に列したが、先生は毎朝五時に起床してノートを作り、その日の講義に使われるならわしであったから、われわれはいつもホヤホヤの講義がきけたわけである。古いノートを繰り返すもののある中で、これは先生の誇りでもあったようであり、また学生の喜びでもあった。

先生は臨時講義に、講演に、ほとんど席のあたたまるいとまとてなく、しかも次々と大著を公にされ、その数は四十五冊の多きに達し（後掲著述目録参照）、論文に至っては枚挙に暇がないほどである。かつて大学で教務課長をされていた時代のこと、事務官や学生と会談しながらも原稿を書かれていたということが語り草となっており、御令息に「おとうさんは」ときけば、いつでも「原稿かいてる」と答えるのが常であったという。しかもその著述の校正は、たいてい汽車の中などでなされた

ときいている。その超人的なエネルギーと、とくに回転の早い論理的な頭脳には全く感嘆するばかりで、その成果が等身大の著述となって結晶したものであろう。

先生は明治十八年一月速見郡杵築町南杵築宗近において、清原博見氏の長男として生まれ、県立杵築中学から熊本第五高等学校を経て京都帝大文学部史学科に入学された。中学時代は陸上競技の選手をされていたそうで、筋肉はたくましく、軽い難聴以外は頑健そのものであった。京都帝大では第一期生で、同級生に西田直二郎博士などがある。明治四十三年に大学を卒業され、ひきつづき同大学院で日本神道史を専攻された。その後京都皇典講究所分所・神官司庁・京大図書館などに勤務され、もっぱら神道史の研究に専念された。その最初の成果が「神道沿革史論」で、これまで神道家の唯我独尊的な神道哲学しかなかったわが国に、原始神道から江戸期の仏教神道・儒教神道に至るまでの客観的かつ総合的な神道史をはじめて提供したものとして、まことに前人未発の分野を開拓したものであった。この概説的研究を土台として完成されたのが「徳川幕府神社に関する制度」で、のち母校に提出されて学位論文となり、前著の改定増補版と合わせて「神道史」として出版された（昭和七年）。先生念願の神道史の研究はこれで一応大成され、日本における斯界の権威としての地歩が確立されたのである。

以上が先生の苦斗の時代で、いわば神道史の研究に全生命を傾倒された時であった。この頃もうけられた長男・次男・三男の方々を、それぞれ宣雄・国雄・道也と名づけられたのも、決して偶然ではなさそうに思われる。

先生の学的活動はこれから一層活発となり、広島に移られてから日本道徳史・日本思想史・国体論史・日本史学史等々、その著述は枚挙にいとまがないことは前に述べた通りである。

先生の学問は、そのテーマからして、また時代の関係もあるが、日本主義的であったといってよかろう。しかし当時往々にしてみられた独断的な国粋主義者とは異なり、どこまでも客観的・批判的であった。私は師範時代に池上校長から示されて先生の「武士道史十講」を読んだが、いまだにそのすぐれた批判力に感激したことを忘れられない。先生が戦争末期ある筆禍事件によって断然辞職されたことなどからみても、先生の学問の性格がわかるであろう。

第二に先生の学問は実に幅が広かった。神道から出て道徳史・思想史・文化史など、行くとして可ならざるはなかった。最近は古文書学にまで手をそめて、ついにこれをマスターされた。この先生の幅の広さに私はほとほと感嘆したものである。第三に先生の研究は、書物でも講演でも、平明でわかりやすかった。先生が専門的な学問を大衆化した功績ははなはだ大きい。

先生の学問について書きたいことは多々あるが、先生が六十すぎてから古文書の整理に手をそめられ、ついに大分県史料を完成された努力には、全く頭がさがる。おそらく先生畢生の研究テーマであった神道史に関係する宇佐八幡宮史料の出版に、学者としての最後の生きがいを感じられたのであろう。私なども先生とともに机をならべて合宿したものであるが、若いわれわれが朝寝坊していると、先生はいつの間にか起きて、仕事をしているのが常であった。朝五時に起きて仕事を片づける習慣を最後まで守られていた。昭和三十二年十一月大分合同新聞社から文化賞を与えられたのは、日本史学界に対する貢献はもちろん、とくに県古文書整理の功績を認められてのことであった。

大分県史料もあと一巻で全二十五巻が完結するのに、先生はそれを待たずに旅立たれた。さる十一月の本会の十週年記念式典にも先生のお顔を拝することが出来なかった。時間は冷酷にも一切のものを推し流していく。先生もすでに歴史上の人となられた。しかし先生の残された偉大な業績は、永却に歴史上に光りかがやくであろう。（一九六四、一二、記）

清原貞雄博士略歴

年・月・日		
明治一八・一・一〇・	大分県速見郡杵築町大字南杵築一八五八に生る（父清原博見氏）。	同
同　三六・　三・三一	県立杵築中学校卒業。	同　四四・　四
同　四〇・　三・三一	熊本第五高等学校卒業。	同
同　四三・　七・一三	京都帝国大学文学部史学科卒業。	同
同	京都帝国大学大学院入学（神道史専攻）。	同
同　四四・　四	皇典講究所京都支部講師。	同講師を辞す。
同	宇治山田市神宮司庁太神宮史編集嘱託。	同
同　八・三一	同右を辞す。	大正　三・　八・一七
同	大学院退学。	同　八・二七
同	京都帝国大学図書館司書。	同　八・二八

同	八・六・一三	同右を辞す。
同	六・一六	内務省神社局嘱託（神社に関する調査事務）。
同	九・四・一	日本大学講師（神道史並びに国民思想史担当）。
同	一一・四・二五	広島高等師範学校教授。
同	一五・八・二二	京都帝国大学より文学博士の学位を受く。
昭和	四・四・二〇	広島文理科大学教授。
同	八・一〇	広島高等師範学校教授兼任。
同	一〇・八・三一	欧米各国へ出張。
同	一一・三・二〇	帰国。
同	一五・四・三〇	兼職を免ず。
同	一七・四・六	広島文理科大学教務課長。
同	一八・一二・二二	広島文理科大学教授を辞す。
同	一九・二	海軍省嘱託。
同	二〇・四・三〇	郷里杵築に疎開帰国。
同	二七・四	大分県史料刊行会監修。
同	三二・一一・三	大分合同新聞社より文化表彰を受く。
同	三九・九・一三	逝去。享年八十才。

清原貞雄博士主要著述目録

（書名）	（発行年月日）	（発行所）
神道沿革史論	大八・六・二〇	大鐙閣
国体論史	大九・	内務省
明治時代思想史	大一〇・一〇・二五	大鐙閣
日本道徳論	大一五・四・一三	改造社
武士道史十講	昭二・三・一〇	目黒書店
日本史学史	昭三・五・一五	中文館
日本上代国民の精神生活	昭四・九・一〇	中文館
提要 日出る国	昭四・一〇・一五	精華房
思想史 思想的先覚者としての山鹿素行	昭五・二・二〇	藤井書店
幕末明治時代史	昭五・四・二〇	受験講座刊行会
日本道徳史	昭五・五・一〇	中文館
日本国民の精神	昭六・三・一〇	明治図書株式会社
日本文化史年表	昭六・	中文館
国民道徳原論	昭六・五・一〇	同文書院
縮刷 日本文化史年表		中文館
国学発達史	昭六・一二・一五	六文館
神道史	昭七・六・一八	厚生閣

日本思想史　奈良朝国民の精神生活　昭八・五・一〇　中文館
日本精神概説　昭八・一一・二八　東洋図書株式会社
国史と日本精神の顕現　昭九・一・一六　藤井書店
明治初期文化史　昭一〇・五・二九　賢文館
日本思想史　平安朝国民の精神生活　昭一〇・一〇・二〇　中文館
改訂日本国民思想史　昭一二・六・五　宝文館
改修日本道徳史　昭一二・一・一〇　中文館
日本の使命と国民の自覚　昭一二・三・二〇　目黒書店
日本国体新論　昭一二・四・二〇　育芳社
立国の精神と我が国の文化　昭一二・五・三〇　目黒書店
改訂国民思想史　昭一二・六・五　宝文館
日本古代史論　昭一二・一一・一〇　雄山閣
国体論史　昭一四・二・二五　東洋図書株式会社
神道史講話　昭一四・三・二〇　目黒書店
日本思想史　中世国民の精神生活　昭一四・一一・二五　中文館
日本思想史　上・下　昭一五　雄山閣
日本思想史　飛鳥白鳳国民の精神生活　昭一五・九・五　中文館
日本新文化史(11)江戸時代後期　昭一七・一・一五　内外書籍株式会社
日本武士道　昭一七・四・三〇　学習社
大観日本文化史叢書　日本思想史　昭一七・六・二五　地人書館
日本思想史　近世国民の精神生活上　昭一八・一・一〇　中文館
奈良時代史　前編　昭一八・六・一〇　中文館
日本政体史論　昭一八・七・一五　中文館
奈良時代史　後編　昭一八・九・二〇　中文館
黎明選書　外来思想の日本的発達　昭一九・三・二〇　敞文館
増訂日本史学史　昭一九・九・一〇　中文館
国防科学叢書　山鹿素行の兵学　昭一九・九・五　ダイヤモンド社
大君います国　昭一九・一二・一五　増進堂

編纂書目録

大分県史料　二五巻　自昭和二七・一〇・一〇　至昭和三九　大分県史料刊行会

大分県地方史掲載論文目録

発刊を祝う　大分県地方史一・二合併号　昭二九・一〇
河野清実さんの事ども　同　五　昭三〇・八
大分市史寸評　同　五　同
歴史学の用　同　六　昭三一・二
中野泰行翁の思い出　同　七・八合併号　昭三一・六
別府の史的研究に就て　同　十一・十二合併号　昭三二・七
大友宗麟の社等破却政策に就て　同　十三―十六合併号　昭三三・五